

社会対話「環境カフェ」の実践
 —「レイチェル・カーソンに学ぶ」をテーマに—
 Practice of social dialogue “Kankyo Café”
 - With the theme of “Learning from Rachel Carson” -

多田 満

TADA Mitsuru

国立環境研究所

[要約] 2021年度のオンラインによる「環境カフェ CYJ」でのシリーズ「レイチェル・カーソンに学ぶ」(4回)の実践では、NHKカルチャーラジオ日曜版(2016年1月に4回放送)の内容(話題提供)をもとに「興味・関心をもったもの・こと(キーワード)は、『自然N』『社会S』『生命L』の類型に関連しますか」の「問いかけ」で対話をおこなった。開催後のアンケート結果の「印象に残った点」の回答では、各回の話題提供の内容(カーソン文学などの言説を含む)を通じた理解と共感により、自主的な判断や自ら発信することの必要性がえられ「自分ごと化」するとともに、「環境カフェ」の目的である「人間であること」「いかに生きていくか」を考える機会になった。一方、「もっと知りたかった点」の回答では、カーソン文学など各回の話題提供の理解を深めるとともに、具体的な化学物質や農薬による影響の現状などの専門家による科学的な知識の必要性もあると考えられた。

[キーワード] レイチェル・カーソン, 文学, 環境カフェ, CYJ, 自分ごと化

1. はじめに

レイチェル・カーソン(1907-1964)の『沈黙の春(Silent Spring, 1962)』は、「環境問題の古典」とよばれ、2022年に出版60年になるが、いまなお環境問題を考えるバイブルとして読み継がれている(多田 2011)。カーソンは、海洋生物学者であり、『沈黙の春』とともに『潮風の下で(Under the Sea Wind, 1941)』、『われらをめぐる海(The Sea Around Us, 1951)』、『海辺(The Edge of the Sea, 1955)』の「海の三部作」、ならびに子どもの自然教育をテーマとした『センス・オブ・ワンダー(Sense of Wonder, 1965)』で知られている。

「環境カフェ」は、専門や職業の枠を超えた市民(高校生や学生もふくむ)の交流による環境(研究)に関する社会対話(環境対話)であり、科学性(科学的知識)だけでなく、人文学的教養(文学)や環境倫理などの人間性から、専門家(研究者)と市民が対話の過程でともに理解と共感をえる(自分ごとと捉

える)ことを目的とする(多田 2018, 国立環境研究所 2020)。さらに参加者は、生命(人)と自然, 社会(経済)のかかわりの理解から「人間であること」「いかに生きていくか」とともに考える。

2015年より対面で始めた「環境カフェ」はこれまでに、「レイチェル・カーソンと『センス・オブ・ワンダー』」, 「生物の多様性〜レイチェル・カーソンから始まる環境意識」, 「第4回九大環境カフェ」では「R. カーソン『沈黙の春』を通してSDGsを考える」(多田・田中 2020)などのテーマでカーソンの文学を取り上げてきた。さらに、NHKカルチャーラジオ日曜版(2016年1月に全4回, ラジオ第2, 以下, カルチャーラジオ)で担当した「レイチェル・カーソンに学ぶ」の内容をもとに2016年と2019年に「環境カフェ東京」と「環境カフェつくば」をそれぞれ開催している。

また、カーソンの『海辺』などのネイチャー・ライティングと生態学をそれぞれ専門と

する研究者らによる『海辺』の生態学」をテーマに開催した実践例（第1回環境カフェ下田）を報告した（多田・戸祭 2018）。

一方、全国規模の組織である青年環境 NGO クライメート・ユース・ジャパン（Climate Youth Japan：CYJ）の勉強会では、学生主導による「CYJ 環境カフェ」として2021年度からオンライン開催している。2021年度は、これまでの「環境カフェ」で取り上げた「地球の未来—『環境を考える』」や「環境問題は人間問題」などのテーマと共にシリーズ「気候変動」や「持続可能性」、ならびに「レイチェル・カーソンに学ぶ」のテーマで開催した。

そこで本報告では、「CYJ 環境カフェ」で実践したオンライン開催のシリーズ「レイチェル・カーソンに学ぶ」（4回）の概要とアンケート結果について報告する。

2. 「CYJ 環境カフェ」でのシリーズ「レイチェル・カーソンに学ぶ」の実践

「環境カフェ」は、毎回、「話題提供」→「問いかけ」→「回答」（類型分け）→「対話」の手順で開催し、終了後にアンケート調査をおこなった。（多田 2018, 国立環境研究所 2020, 多田・田中 2021）。「環境カフェ CYJ」（オンライン、4回分）では、毎回、4～5名の参加でカルチャーラジオの内容をもとに「環境カフェつくば」でのシリーズ「レイチェル・カーソンに学ぶ」のスライド資料を一部変更して話題提供に用いた。また、それぞれの「話題提供」を通して「興味・関心をもったもの・こと（キーワード）」は、『自然 N』『社会 S』『生命 L』の類型に関連しますかの「問いかけ」で、各自の「回答」（キーワード）を「自然、社会、生命」と関連づけて対話をおこなった。なお、類型名は、国立環境研究所憲章の「自然と社会と生命のかかわり」より選んだ。

まず、「第16回環境カフェ CYJ」（2021年12月11日）では、『海辺』にみる生物多様性」をテーマにカルチャーラジオ（2016年1

月10日放送分）の内容（「おそろべき力」、「死の霊薬」、生命の連鎖が「毒の連鎖」に、放射線と放射能、「発癌物質の海」、二人にひとり、環境ホルモン、複合汚染、「はげしい雨が降りそうだ」）をもとに「レイチェル・カーソンの生涯」と『沈黙の春』—環境問題の古典」について話題提供をおこなった。合わせて『温室効果ガスは大気汚染物質』、米環境当局が認める」という記事も紹介した。

「第17回環境カフェ CYJ」（2022年1月16日）では、『海辺』にみる生物多様性」をテーマにカルチャーラジオ（2016年1月17日放送分）の内容（「海の伝記作家」カーソン、「海の三部作」、海辺—美と魅力に溢れた場所、海の生物多様性、「生命のゆりかご」—アマモ場、「つながり」と「個性」、海辺の「進化の力」、海辺の「生命力」、観察の人」カーソン）をもとに話題提供をおこなった。合わせて「気候変動適応法にみる生物多様性」について解説した。

「第18回環境カフェ CYJ」（2022年1月29日）では、『センス・オブ・ワンダー』の感性に生きる」をテーマにカルチャーラジオ（2016年1月24日放送分）の内容（「センス・オブ・ワンダー」—神秘さや不思議さに目を見はる感性、「美しさと神秘」の世界、「知ることは感じることの半分も重要ではない」、「生命への畏敬」—シュヴァイツァー、6つのキーワード—「環境と生命」の思想）をもとに話題提供をおこない、合わせて「6つの Sense（キーワード）」について解説した（図1）。

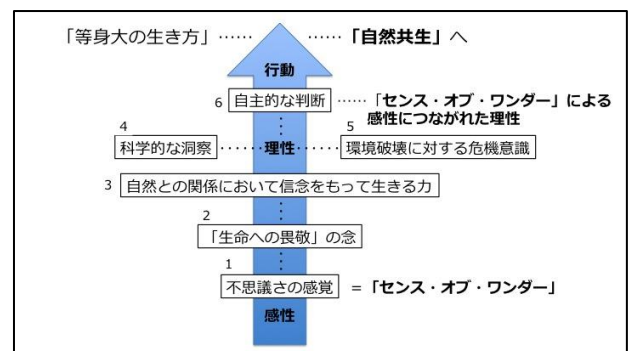


図1. 6つのSense（キーワード）の関係

「第19回環境カフェCYJ」（2022年2月26日）では、『べつの道』を考える—科学文明』をテーマにカルチャーラジオ(2016年1月31日放送分)の内容(「環境問題は人間問題」, 地球倫理—「環境と生命」の倫理, 環境倫理, 生物倫理—「生命の倫理」①②, リスク社会に生きる, 「いのちの共生」—「真の文明」のために, 「未来の春へ」—調和型社会, 「科学を演奏する」—社会対話)をもとに話題提供をおこない, ドネラ・メドウズらの『限界を超えて』(1992年)の言説をもとに「成長(拡大)には限界があるが, 発展(改善・向上)には限界がない。持続可能な社会を目指すためには, 生命を基点に生命(人)—自然(環境)—社会(経済)のつながりのなかで, 経済的価値から「生活の価値」(生命をよりよく活かす)を最優先に考える価値の転換がもとめられる。持続可能性によりエネルギーや水, 食料問題が解決される」ことを模式図(図2)で解説した。また, 明治時代初期にはじまった

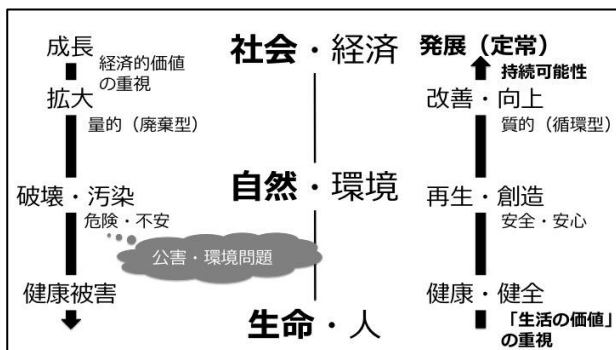


図2. 成長と発展に関する模式図

国内初の公害事件, 足尾銅山の重金属汚染による鉍毒事件で, 生涯をかけて闘った田中正造(1841-1913)の「真の文明」は生命(いのち)よりも経済(カネ)を重視するようなことはない, つまり, 田中の晩年の有名な日記の一節「真の文明は, 山を荒らさず, 川を荒らさず, 村を破らさず, 人を殺さざるべし」(田中 2005)を紹介した。

3. 「環境カフェ CYJ」でのシリーズ「レイチェル・カーソンに学ぶ」のアンケート結果

毎回の「環境カフェ」開催後には Google フォーラムによるアンケート(この勉強会で印象に残った点ともっと知りたかった点)の回収をおこなった。まず, 「印象に残った点」の回答は, 第16回では, 「国民性に合わせた市民の政策へのコミットは, 市民会議を提案しているユース団体として重要な視点」「レイチェル・カーソンの考えの概要が理解できた」と具体的に「人間はもっと謙虚にならなければいけない」「化学物質による影響は1世代では見える化されない場合がある」との回答があった。第17回では, 「レイチェル・カーソンの海の環境についての発言」「海辺の生態系に関する話」など, 文学の言説を通して理解が深められたようであった。

第18回では, 「信念というワードが印象に残った。自分の信念について考えたことがなく, これから言葉にしてみようと思った」「センス・オブ・ワンダーという言葉は経済界にささりそうだなと思った」「センス・オブ・ワンダーという感性に注目することや, その感性からどう行動に移していくか」「畏敬すべきものへの直感を鈍らせてしまう。日々の生活がルーティーン化している私にセンス・オブ・ワンダーの大切さを教えてくれた。また, 自然から感じる畏敬の念から, 信念, 科学, 危機意識を経て自主的な判断のもと行動することは環境へのアクションを推進していく中で広めていきたいプロセスだと思った」など, 「環境カフェ」の目的である「自分ごと化」につなげることができた。

第19回では, 「成長と発展という言葉の細かな違いやそこから広がる展望は初めて知るものであった。何気なく認識していて, 使い分けも意識していなかったため, これからの意見発信の際には注意したい(図2)」「生活者としての私, あなた, 彼らという視点」「政治家の強調する『成長』には『経済的価値の重視』の側面が強く, その成長を消費者が構成しているということ, 『発展』するためには

生活者として持続可能性を持った発展が必要であることが印象に残った」「『限界を超えて』の言説にあった『価値の転換』を図ることで定常性のある発展がもたらされ、『真の文明』を構築することができるという考えの発信が必要だと思った」(図2)との回答があった。

以上から、各回の話題提供の内容(カーソン文学の言説を含む)を通じた理解と共感により、自主的な判断や自ら発信することの必要性がえられ、「環境カフェ」の目的である「人間であること」「いかに生きていくか」を考える機会になった。

つぎに「もっと知りたかった点」の回答は、第16回では、「毎回参加しているのですが、今回の名著から学ぶ形式はかなり満足度が高かったため、他の本も取り上げて欲しい」「本の内容について」「日本における化学物質や農薬による影響の現状が知りたかった」「農薬の問題点を踏まえ環境負荷をかけない農業の在り方はどのようなものか、考える必要があると感じた」など、第17回では、「カーソンが生態系についてどのように考えていたのかを掘り下げて欲しかった」と本の内容から専門的な内容に関心が向いていることが分かった。

第18回では、「初めて知ることが多く、満足できた」「カーソンの思想」「カーソンの人柄がわかるエピソード」などが挙げられた。第19回では、「似たような意味の言葉を整理する時間があれば、より理解が深まったと思われた」「田中正造の言葉が非常に興味深かったため、他の人でも『真の文明』や『発展』について言及している人がいるようであれば知りたい」と、カーソンや田中の言説の理解を深めるとともに、化学物質や農薬による影響の現状などの専門家による具体的な科学的な知識の必要性もあると考えられた。

4. おわりに

2022年度は、国立環境研究所(生物多様性領域)主催のシリーズ「レイチェル・カーソ

ンの文学を自然共生から読み解く」では、「『沈黙の春』の『1 明日のための寓話』より」と「センス・オブ・ワンダー」の世界、「『海辺』にみる生物多様性」などのテーマでそれぞれオンライン開催(2023年1月までに6回)した。

また「CYJ環境カフェ」では、2022年度はシリーズ「R.カーソン『沈黙の春』から気候変動問題を読み解く」(6回)を開催したので、今後は「気候変動」に関連する「CYJ環境カフェ」の実践について報告したい。

謝辞

対面での「環境カフェ」、ならびにオンラインによる「環境カフェCYJ」に参加して下さった高校生、学生、社会人すべての皆さまに感謝申し上げます。

参考文献

- 国立環境研究所, 2020, 社会対話「環境カフェ」—科学者と市民の相互理解と共感を目指した新たな手法, 環境儀(国立研究開発法人国立環境研究所), 76, 16pp.
- 多田満, 2011, 『レイチェル・カーソンに学ぶ環境問題』, 東京大学出版会, 東京, 208pp.
- 多田満, 2018, 社会対話の実践——「環境カフェ」を例に, 環境科学会誌, 31, 207-216.
- 多田満, 田中迅, 2020, 社会対話の実践「環境カフェ」とSDGsのかかわり. 日本環境教育学会関東支部年報, 14, 41-46.
- 多田満, 田中迅, 2021, 社会対話の実践「環境カフェ」のオンライン化. 日本環境教育学会関東支部年報, 15, 9-14.
- 多田満, 戸祭森彦, 2018, 科学と文学による社会対話「環境カフェ」の実践—『海辺』の生態学—をテーマに—, 環境教育, 28(1), 30-33.
- 田中正造, 2005, 『田中正造文集〈2〉谷中の思想』, 岩波文庫, 東京, 407pp.